

## Clinical impact of non-culprit lesions on 1-year mortality in very elderly patients with acute coronary syndrome

樋口 聡

杏林大学医学部付属病院 循環器内科

### 【背景】

我が国に高齢化社会が到来して久しく、心筋梗塞や不安定狭心症を包括した急性冠症候群（ACS）の増加は重大な懸念事項である。高齢化に伴い、85歳以上の超高齢者で冠動脈造影（CAG）、経皮的冠動脈形成術（PCI）を行うことは稀ではなくなった。このような患者群は複雑な多枝病変であることが少なくない。一般的には責任病変だけでなく、非責任病変を治療することはその後の心血管イベント抑制に有益である可能性が示されている。しかし超高齢者におけるデータはなく、残存病変有無がその後の経過に与える影響については不明である。

### 【方法】

杏林大学医学部付属病院にACSで入院し、カテーテル治療を受けた91名を後ろ向きに解析した。入院時のCAG・PCI所見を抽出し、残存病変が1年生存率に影響するかを調べた。責任病変はACSの原因として矛盾しない高度狭窄、または閉塞と定義した。非責任病変は75%以上の狭窄か、完全閉塞だがACSの原因ではないと判断できる病変と定義した。残存病変はPCIを行わなかった非責

任病変とした。エンドポイントは1年生存率とした。

### 【結果】

登録された患者の年齢は $88.2 \pm 3.0$ 歳で52%が男性であった。フォローアップの中央値は341日（25%タイル-75%タイル：15-1302日）であった。33人（全体の36%）が1年以内に死亡しており、そのうち25人が心臓死であった。責任病変は50例で左前下行枝（LAD）に、10例で左回旋枝（LCx）に、31例で右冠動脈（RCA）に認められた。一枝病変が45例に、二枝病変が25例に、三枝病変が21例に認められた。残存病変に関しては20症例でLADに、22症例でLCxに、21症例でRCAに認められた。Cox回帰分析ではLADの残存病変のみ1年死亡に関連し、この群は2ヶ月以内に全例心不全で死亡した。年齢、性別、Killip分類で調整したhazard ratioは3.00（95%信頼区間1.41-6.37； $p = 0.019$ ）であった。

### 【結論】

超高齢者ACS症例においてLAD残存病変は1年後死亡率の独立した予後規定因子である。